

一次の文章を読んで、後の問いに答えなさい（問題の都合により省略した部分がある）。

小説家の「私」は姪である小学校6年生の「亜美」と春休みを利用して徒歩で旅に出る。サッカー好きの「亜美」は道中ボールを蹴り続け、「私」は目についた景色を文章にする。

「もう少し行ったら鳥の博物館があるな」

「鳥の博物館？」少し考えてから亜美は言った。「あたし、バス」

私は無言で抗議の意を示した。

「なに、もしかしで行きたいの？」

「いや、別に」

「行きたいんだ？」¹ なんだか嬉しそうに笑う。「別に一人で行ってきいよ、あたしは外で蹴ってるからさ」

「いい、行かない」

「素直じゃないんだからな」

遊歩道は親水広場につながり、道の駅のような大きな建物があった。農産物直売所やレストランもあるようだ。もう一時を過ぎた頃で、我々はそので昼食をとることにした。

「言うの忘れてたけど、あたし、おかーさんに二万円もらってきただよ。自分のごはん代はそこから出せだつてさ。そんで、お小遣いも持ってきた」

地産地消を謳う併設のレストランの入り口で、亜美は膝に手をつき、看板のメニューにかぶりついて、残念そうにこちらを振り返る。

「オムライスないのかあ」

いつものことだが「ほかのもののじゃダメなのか」と訊く。

「オムライスならなんでもいいんだけど、ないならあたし、お店人らないで簡単なもんでいいや。節約して、オムライスがあつたらその時にどーんと使う。そういう計画に決めました」

その物言いが、私に一つの伝言を思い出させた。

「おかーさんから？ なに？」

I

派手に驚いて、ほとんど叫び声を上げた。多くはない周囲の人がこちらを見やるのに、笑って軽く頭を下げる。勘弁してくれという注意も聞こえないか、へたりこみながら力なく何か呟いている。「おかーさん」だけ微かに聞こえた。

溶けるように下がる頭と広がっていくベンチコートの裾を見下ろしながら、私はその分け目に向かって「でも」と口走っていた。「全部の言いつけを守る必要があるか？」

さよとんと見上げる顔は、ややあつてからみるみる華やいでいった。極まったおしまいに「いいの!？」とまた大声を發した。

ばれやしないし、卵は撮った方がいいはずだ。持つべきものはこだわりのないテキトーな叔父さんだと亜美は笑って、そうだろうと私もうなずく。

「こりや、今日の夜」² はんはオムライスに決まりだねえ」

「それで」咳ばらいを打ってから、私は続けた。「ここからもう少し行くと、鳥の博物館というのがあるらしい」

「え？」察しのいい亜美は跳ねるように立ち上がった。「おもしろそうじゃん！」

我々は機嫌よく調子よく笑いながらおにぎりやら唐揚げやら飲み物やらを買い、親水広場の芝生で、小さな子供らのはしゃぐ水遊びの池を手前に、奥に手賀沼を見下ろしながらお昼にした。三月の気温は高くないとはいえ、日差しは暖かに降りそそぎ、遠い水面を緑青に染め、水飛沫を白く輝かせていた。

準備万端で向かった鳥の博物館は休館日だった。電気の消えた暗い館内をガラス越しに見ながら果然と立つ私の肩に、亜美が手を置いた。

「旅の帰りにまた来ればいいじゃん？ わたしも付き合っからさー」

³ 私は道化と本気を混じらせた低い声で「約束だぞ」と言った。

「約束、約束！」と私の肩を叩いて笑った。

予定が狂ったので、早めに次の目的地へ行くことにする。滝前不動だ。

(中略)

滝前不動は、志賀直哉邸跡と同じように台地の裾の傾斜にあった。境内はみな竹林で、崖に埋め込まれた石組の上に据えられた竜頭が口を開けて水を出しているのが、名の由来となった滝らしい。昔は台地の湧き水がその口から派手に落ちていたのかも知れないが、今は割れた喉元をだらしく伝って、下の溜まりでちよろちよろ音を立てている。

「これが滝？」と亜美はボールを抱えたまま半笑いで見上げている。「想像とだいぶちがうな」

「文句が多いな、さつきから」

「竜の角も折れちゃってるし。これでほんとに守ってくれるの？」もう振り返って、そばの石碑を指さす。「これは何よ？」

「不動明王真言」と書いてあるのを読む。その横に、ひらがなで彫られているのが「密教の呪文」だと教えてやった。

「えーじゃあ、真言宗の真言ってこれのことなんだ？」

「不動明王のはこれ。唱えて守ってもらう」

「みんなに呪文があるんだね」ゆっくり言うのと、足首を回しながら読み上げ始めた。「のうまくさんまんだ ばざらだん せんだ まろしやだ さはたや うんたらたかんまん」意外に笑わず、しばらく石碑をじつと見ていたが、急に「意味は？」と顔を上げた。

「意味はそんなに重要じゃない。このまま唱えるのが一番大事」

「えー？」首を傾げて細目で睨んできた。「わかんないからテキトー言ってんじやないの？」

信じたくなきやそれまでだと言ったら「む」と唸った。

(中略)

ちようど不動堂の裏にあたるところで、我々は道の先に、野生のキジを見つけた。

「ほんとにいるんだ、キジって」と亜美は竹から顔を覗かせて言う。「なんかウソみたい、桃太郎じゃん」

「現実にいなかったらお伴にできないだろ」

適当に話を合わせながらリュックを下ろし、ゴムマツトを地べたに敷いて、

「え、なに」亜美は声と眉をひそめた。「書くの？ キジを？」

「書きたいだろ、キジは」と座り込む。「逃げちゃうから驚かすなよ」

「じゃーここでリフティングできないじゃんつ」派手な眉の動きで必死さが伝わる。「どーしろって？」

「下に戻るという。それか一緒に見てもいいし」

「下でやって来ますよーだ」とベロでも出しそうな言い方で、亜美は来た道を戻っていった。

II
を出した。

三月九日 15:36 - 16:07

A

不動堂の裏手をぐるりと上り回って戻る、きれいに整備された竹林の小道。切って積まれた竹が隣の農家の敷地とを塀のように隔てるその上に、色鮮やかな雄のキジがとまっている。赤い顔は、ヘルベツト生地をハートに切って両側に並べ、黄色い目のボタンで留めたような具合だ。その二つの裂け目から、白っぽいくちばしが突き出している。下るにつれて青紫から光沢のある緑色に変わる首が、時折、誇らしげに差し上げられると、釣り合いを保つように、クリーム色に黒い斑が交じってきれいな縞模様になった長い尾羽が上下に動いた。ふいの風に竹の葉が鳴る。何を気にしたか、身を伏せたキジは、竹塀を向こうに降りて、落ち葉を踏み鳴らしてクマザサの茂みへ入ったらしい。ガサガサという音が斜面を下って遠ざかっていく。しばらくして、下りきったところにある小さな畑に出るのが見えた。一步一步、しっかりとした足取りにも動かない黒い背中。横を向いて、ぞっとするほど鮮やかな頭の赤。血のように暗く詰まったその色は、陰にいるといっそう濃く見える。キジはそのまま、不動堂の方へ歩いて行った。

下で鋭い鳴き声と羽音がすると同時に、どこか緩慢な叫び声も上がった。不動堂の前に出て母衣打ちしたキジに驚いたらしい。竹林を下りつつそちらに意識を向けると、驚きながらも続いているリフティングの音が聞こえた。直後、ガサガサ草切る派手な音と一緒になんだか間抜けな叫び声、次いでボールの跳ねる音が二度三度、小さくなって途絶えた。不動堂の前に出ると、尻もちをついた亜美が待ってましたと言わんばかりに「キジ！」と叫んだ。「そっちから来て」クマザサの茂みの方を指さし、「その裏抜けて」と不動堂を指さし、そのままさらに奥の竹林を指さした。「あっちにぶわーって走ってった！」

「キジって速いよな」

「速い！」とやけに嬉しそうに言って情けない顔を浮かべる。

記録は五十三回と言うのでノートに書き留める。「少ないな」

「仕方ないじゃん、キジが出たんだから」

「その前、何してたんだよ」

「ちよっと色々やってたんですっ」

叩きつけるような語尾と一緒に立ち上がり、滝前不動を後にする。ちよっと収穫期を迎えたプロッコリー畑の横を通って手賀沼の方へ歩いて行つた。土から太い茎をのばし、天辺で大きな葉に囲まれた蕾は緑に詰まっている。二、三日のうちに収穫されるだろうが、亜美は見向きもしなかった。

手賀沼の遊歩道に人はおらず、亜美は嬉しそうにボールを足裏でなめて転がしていく。道が沼辺を少し迂回したところにはビオトープが造られ、ヨシ原がそれを囲む。それを見下ろして歩く道に一羽のコブハクチョウが休んでいた。

静かに喜んだ亜美は膝に手を置き、回り込むようにして近づいていった。人馴れしたコブハクチョウは気にしながらも羽づくろいを止めない。本来は渡り鳥だが、日本に棲みついた外来種だ。

「ブラックバスとかミドリガメと一緒にだ？」

受験生らしいところを見せつつ、距離をとってボールをちらつかせているが、犬じゃあるまいし、先方はまったく興味がない。時に行っているのであろう池を見下ろすと、人がヨシを踏み倒した道が畔に立つ柳の下まで続いていた。

この下で書くと言うと、「はいはい、どーぞ」と慣れたものでコブハクチョウから目を離さずに言う。「あたしはこの子の近くでやるーっ」と

「そっちの田圃の脇に降りてやれよ」私はビオトープの反対を指さした。「道でやるなよ、あとハクチョウにボール当てるなよ」

「わかってるって。当てるはずないじゃんねー？」

コブハクチョウに首を傾けると、亜美はボールを手を乾いた田圃の方へ歩きかけたところで、重大なことを思い出したようにこちらを振り返った。

「ちよっと聞いててー」亜美は右の掌にボールをのせ、頭上に捧げ持つようにして目を閉じた。何をと言いかけたところへ「しずかに！」と注意が飛ぶ。その声を気にしたかコブハクチョウが立ち上がるとするその奥で、亜美は大きくゆっくりと息を吸い込んだ。

「のうまくさんまだ ばざらだん せんだ まころしやだ さはたや うんたらたかんまん！」

私は亜美を見つめた。目を開けた亜美は、満足げに片方の口角を持ち上げて胸を張った。

「いつの間に？」という私の声は驚きに満ちていたはずだ。暗記も苦手なくせに。

「さっき、キジが出る前」得意そうな笑顔を見せる。「魔法の呪文みたいに、リフティングの前に唱えることにしたの。

願いを込めてさ？ いいアイデアでしょ！」

5 それでこそ真言だと私は思った。

(中略)

それから我々はコンビ二を二軒回ってオムライスやサラダを買い、ホテルにチェックインした。疲れが少しでもとれるように大浴場のあるホテルを選んだ甲斐あってというか、亜美はずいぶん長風呂して部屋に戻ってきた。誰もいなかったくさん泳いだと言って、濡れた髪のままオムライスを食べようとするのを制する。

「ちよっとでも熱出たら帰るしかないんだから。ただの風邪気味でも」

「コロナ感染うたがいつてやつ」

テレビでは、イタリアとイランでの感染拡大と入国拒否、マスク不足と、トイレトペーパーの買い占めによる品薄を伝えている。一カ月後に出された緊急事態宣言を思えば、この頃は危機感もそれほどなかった。こんな旅に躊躇なく出られるくらいには、それまでと地続きの日常があった。

(乗代雄介『旅する練習』による)

* 母衣打ち：翼を激しく羽ばたかせ、音を立てること。

* ビオトープ：池などの生物が住みやすい場所。

問1 ―線1「なんだか嬉しそうに笑う」とあるが、この時の「亜美」の気持ちとして最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 実は自身も「私」と同様博物館に興味があり、ついていけるかもしれないと心躍っている。

イ「私」に意見を求められたので、パートナーとして認められたように感じ舞い上がっている。

ウ 実は博物館に行きたいのに、本音を言えない「私」の強がる姿を見て面白がっている。

エ「私」が普段とは違って無邪気な反応を示したため、親しみを感じている。

オ「私」が博物館を見て回っている間は、外で待ちながらボールにさわれるので楽しみにしている。

問2

I

に入る表現を文脈から考え、答えなさい。

問3

―線2「ここからもう少し行くと、鳥の博物館というのがあるらしい」とあるが、この時の「私」の様子として最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 博物館へ行こうという二人の気持ちを再確認している。

イ 博物館へ行くために道中の案内を買って出ようとしている。

ウ 博物館へ行くことで鳥に興味を持つてほしいと考えている。

エ 博物館へ行こうと「亜美」に取引を持ちかけている。

オ 博物館へ行くことで「亜美」が元気になると思っている。

問4

―線3「道化と本気を混じらせた低い声で『約束だぞ』と言った」とあるが、このときの「私」について述べたものとして最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 冗談で念押しをしているように見せたかったのに、「亜美」の軽率な言動に我慢がきかず、真剣さがにじみ出てしまっている。

イ 行きたいという本心を「亜美」に素直に伝えるのは照れがあるため、あえて重々しい言い方をするので冗談に見せかけている。

ウ 博物館が休館日だったことに呆然としつつも、その様を「亜美」に悟られまいとごまかすのに必死になっている。

エ 自身の失敗に落ち込んでいたが、明るい「亜美」の振る舞いに元気づけられ、行きたいという気持ちを取り戻しつつある。

オ 休館日を調べてこなかった自分の間抜けさを反省し、「亜美」に失敗を見せてしまったことを恥じている。

問5

―線4「先方」は何を指しているのか。ここより前の本文から抜き出さない。

問6 ―線5「それでこそ真言だと私は思った」とあるが、「私」はなぜこのように考えているか。最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 「亜美」が真言の意味にはこだわらずとも、音の通り声に出して唱えたから。

イ 「亜美」が真言を一字一句正確に覚える過程で、人間的に成長したから。

ウ 「亜美」が真言に意味は見出せずとも、自分の願いのありかに気づけたから。

エ 「亜美」が真言を唱える練習をすることで、その真価を悟ったから。

オ 「亜美」が真言のご利益を得るために、ゆつくり唱えたから。

問7 本文の内容に合致するものを次の中から二つ選び、記号で答えなさい。

ア 「亜美」は、真言をひそかに暗唱して「私」を驚かせようと考えていたため、何をしていたのか問われた時にそれをごまかした。

イ キジの間拔けな鳴き声に驚いて尻もちをついた「亜美」は、かけつけた「私」にキジを追いかけるように指さした。

ウ 「亜美」は、鳥にボールを当てないと言っていたのにもかかわらず、リフティングの際に当ててしまい、「私」から怒られてしまった。

エ はじめは鳥に興味がないそぶりを「私」に見せていたが、実際に鳥と出会った「亜美」の態度からは、関心と親しみが感じられる。

オ コロナウイルス感染拡大のせいで思うように旅ができない「私」と「亜美」は、ホテルの部屋で好きなものを食べることをせめてもの息抜きとしている。

カ 「私」と「亜美」は、互いにあたたかな交流を通じて、コロナウイルス感染拡大による不安な日常を乗り越えようとしている。

問8

Ⅱ

に入る言葉を本文から抜き出さない。

問9 本文中、

A

が示している範囲はそれ以外のところと性質が異なる。その理由を次のように説明した。

(①)、(②)に入る十字以内のふさわしい表現を、それぞれ自分で考えて入れ、説明文を完成させなさい。ただし、「旅」という言葉を(①)、(②)両方に必ず用いること。ただし、句読点等の記号も一字として数える。

【説明文】

A

が示している範囲は「私」が(①)ものだが、それ以外のところは「私」が(②)ものだから。

二 次の文章はアラスカで生きた写真家、星野道夫(1952～1996)について書かれたものである。これを読んで、後の問いに答えなさい。ただし、句読点等の記号も一字として数える。

彼は九十六歳になるアサバスカン・インディアン¹の長老ピーター・ジョンに会いに行った話を書いている。ただ会いたかったのだと星野は言うけれども、ともかく顔を見て、話を聞いて、その生きた時代の空気を感じとる。そうとしか言いようなない時間を過ごす。そして老人は言う――「わしがこの世を去った時、あらゆるものが一緒に死んでゆく、あらゆる物語がな……」。

星野を動かしていた力の一つはこの感覚、老人と共に一つの時代の記憶が失われるというこの切羽つまった焦燥感である。老人が一人亡くなるのは図書館が一つ焼け落ちるようなもの、²という言い回しはアラスカでは比喩でもなんでもない。この切迫感の背景にはアラスカの特異な歴史がある。狩猟民族は何十世代にも亘って同じように生きてきた。彼らを見る時にぼくたちはまず進歩史観を捨てなければならぬ。父の世代と同じ生きたかを確保することが子の世代の第一の義務だった。そうやって人々は大事なものをなくさないよう、いかなる自然の変異にも負けずに子孫を残せるよう、力を尽くしてきた。その中からゆつくりと神話が生まれ、わずかな新しい技術が生まれた。時にはとんでもない災害に多くの人命が呑み込まれたが、それでも人は生きつづけた。そして、これが本来の人間の生きたかたであった。動物たちとほとんど同じと言ってもいい。動物たちと違うやりかたに頼った時から自然からの離反、自然とは違うルールに従う人間の生きたかたが生まれた。その成果を今われわれは誇っているのであり、その悲惨を今われわれは苦しんでいるのだ。

そして、他ならぬアラスカではこの変わらぬ時代がつい最近まで続いていた。いわば日本でならば数千年分の地層を掘り起こさなければ見つからない過去が、アラスカでは表土のすぐ下に埋まっている。その時代を体験的に知る人がまだ生きている。話を聞くことができる。星野は一方では自分が生まれるのがもう五十年早かったらと言っているけれども、しかし他方、彼が間にあったことも事実なのだ。

(中略)

アラスカは記憶以外残らない土地だと星野は言う。だから記憶と口承^{*}が大事になる。だから、老人の話を若い人々は聞かなければならない。ぼくが一昨年(九四年)アラスカに行った時、彼はこの残らないという点を強調した――「人の暮らしは少しずつ変わっています。小さな飛行機で村に入っていつも感動するんですが、村の生活はゆつくり変わっているかもしれないけれど、そこからはんの五百メートルか一千メートル出たところは何も変わっていない。一千年前と同じなんです。彼らは何も残さなかったけれど、大きな遺跡も何も残さなかったということが、逆に彼らのすごいところだと思うんですよ」。

自然の中で自分たちの位置を正しく知る。分を心得る。生きることの意味は生きることそのものにあるのであって、それ以外ではない。人間はずっと何十万年かの間、そういう考えで生きてきた。数千年前にそれを捨てる者が現れ、それがたちまちのうちに世界中に広がって、今見るような攻撃的な文明が作られ、自然を押しつけて人間の生息域が広がられた。昔のやりかたをつい最近まで維持してきた数少ない場所の一つとしてアラスカがある。

(池澤夏樹『旅をした人 星野道夫の生と死』による)

* 進歩史観…人間は過去から現在に向かってまっすぐ発展を続けてきたとする考え方。

* 口承…文字ではなく口で物事を語り伝えること。

* ぼく…筆者(池澤夏樹)のこと。

問1 ―線1「老人が一人亡くなるのは図書館が一つ焼け落ちるようなもの」とあるが、アラスカの「老人」と「図書館」の共通点は何か。二十字以内で説明しなさい。「過去」という言葉を必ず用いること。

問2 ―線2「アラスカの特異な歴史」とあるが、どういうところが「特異」なのか。三十字以内で説明しなさい。「変化」という言葉を必ず用いること。

問3 ―線3「その悲惨を今われわれは苦しんでいるのだ」とあるが、ここで筆者はどのようなことを言おうとしているか。解答らんに合わせて四十字以内で説明しなさい。「文明」という言葉を必ず用いること。

問4 ―線4「大きな遺跡も何も残さなかったということが、逆に彼らのすごいところだと思ふんですよ」とあるが、なぜそのように言えるのか。解答らんに指定された字数で言葉を入れて、説明文を完成させなさい。解答らんに「A」には「遺跡」、**B**には「自然との共生」という言葉を必ず用いること。

三 次の問いに答えなさい。

問1 次の①～⑤の文中にある――線のカタカナを漢字に直しなさい。ただし、送りなが含まれるものは送りながをひらがなで答えること。

- ① コンナンな問題に直面する。
- ② 日の出をオガムために山へ行く。
- ③ オサナイ子どもの遊び。
- ④ マイキヨにいとまがない。
- ⑤ 働き方カイカクを推進する。

問2 ①～⑨の□にひらがなを入れ、それぞれことわざを完成させなさい。

- (1) そのときに、**A** 〳 **F** に入るひらがなを、それぞれ答えなさい。
- (2) **A** 〳 **F** のひらがなを並べかえて出来上がる四字熟語を漢字で答えなさい。

① 暖簾□ 腕**A**□。 (相手の反応や手応えがないということ)

② 朱□ 交□ □ □ 赤**B**□ □。 (人は関わる友によって善悪いずれにも感化されるということ)

③ 鉄□ 熱**C**□ **D**□ □ □ 打□。 (人は柔軟性のある若い内に鍛えなければならないということ)

④ **E**□ **F**□ □ □ □ □ 背比□。 (どれもこれも似たようなもので大したものではないということ)

⑤ 笑**D**□ 門□ □ □ 福来□ □。 (笑いが満ちている人の家には自然と福運がめぐってくるということ)

⑥ 虫□ 居**E**□ □ □ □ □ 悪**C**□。 (普段よりも怒りっぽい状態にあるということ)

⑦ 骨折□ 損□ **B**□ □ □ □ □ 儲□。 (労力を費やしたのに効果がなく疲れだけが残るということ)

⑧ 先**F**□ □ □ □ □ 人□ 制□。 (相手より先に事を行えば優位に立つことができるということ)

⑨ 目□ □ □ 鱗□ **A**□ □ □ □。 (急に物事の真相や本質が分かるようになるということ)

〔以下 余白〕